

## 黙想会『パウロの回心 後半』

『パウロの信仰告白』カルロ・マリア・マルティーニ著 今道瑤子訳 女子パウロ会 1990年 (ミラノの教区司祭向けの黙想)

### 5. 司牧の観点からの究明

この黙想では、パウロが回心の後の19年間、どのように過ごしたかを考えます。

ミレトスでの説教の最初の言葉から始めます。使徒書 20 : 18b~35

長老たちが集まって来たとき、パウロはこう話した。「アジア州に足を踏み入れた最初の日以来、いつも私があなたがたとどのように過ごしてきたかは、よくご存じです。すなわち、謙遜の限りを尽くし、涙を流しながら、また、ユダヤ人の数々の陰謀によってこの身に降りかかって来た試練に遭いながらも、主にお仕えしてきました。役に立つことは一つ残らず、公衆の面前でも方々の家でも、あなたがたに伝え、また教えてきました。神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰とを、ユダヤ人にもギリシア人にも力強く証ししてきたのです。そして今、私は霊に促されてエルサレムに行きます。そこでどんなことがこの身に起こるか、何も分かりません。ただ、投獄と苦難とが私を待ち受けているということだけは、聖霊がどこの町でもはっきりと告げてくださっています。しかし、自分の決められた道を走り抜き、また、神の恵みの福音を力強く証しするという主イエスからいただいた任務を果たすためには、この命すら決して惜しいとは思いません。そして今、あなたがたが皆もう二度と私の顔を見ることがないと、私には分かっています。私はあなたがたの間を巡回して御国を宣べ伝えたのです。だから、特に今日ははっきり言います。誰の血についても、私には責任がありません。私は、神のご計画をすべて、余すところなくあなたがたに伝えたからです。どうか、あなたがた自身と羊の群れ全体とに気を配ってください。聖霊は、神がご自身の血によってご自分のものとなさった神の教会の世話をさせるために、あなたがたをこの群れの監督者に任命されたのです。私が去った後、残忍な狼どもがあなたがたのところへ入り込んで来て群れを荒らすことが、私には分かっています。また、あなたがた自身の中からも、邪説を唱えて弟子たちを従わせようとする者が現れます。だから、私が三年間、あなたがた一人一人に夜も昼も涙を流して教えてきたことを思い起こして、目を覚ましていなさい。そして今、あなたがたを神とその恵みの言葉とに委ねます。この言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に相続にあずからせることができるのです。私は、他人の金銀や衣服を貪ったことはありません。ご存じのとおり、私はこの手で、私の必要のためにも、共にいた人々のためにも働いたのです。あなたがたもこのように労苦して弱い者を助けるように、また、主イエスご自身が『受けるよりは与えるほうが幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、私はいつも身をもって示してきました。」このように話してから、パウロは皆と一緒にひざまずいて祈った。人々は皆激しく泣き、パウロの首を抱いて接吻した。特に、自分の顔をもう二度と見ることはあるまいとパウロが言ったので、非常に悲しんだ。人々はパウロを船まで見送りに行った。

この感動的な説教は、今回の黙想で試みていることと似ています。福音史家ルカは、ミレトスでのパウロの言葉を記すに当たって、パウロが共同体とどう関わってきたかを振り返り、一番心にかけていたことを述べようとした。

「パウロの遺言」「パウロの決別の辞」とも呼ばれるこの説教は、傑作と言えるでしょう。聖書の中で決別の辞は他にも見られます。創世記 49 章のヤコブが息子たちにした遺言、申命記 32 章他のモーセの遺言、またヨシュア記 23～24 章に見られるヨシュアの遺言、サムエル、ダビデ、トビト、マタティアなどもあります。イエスもヨハネ 13～17 章で長い別れの言葉を述べています。パウロの遺言もこの系列に並ぶものです。

パウロの遺言は、分析すると「私－あなたがた」の関係によっています。「私は」・・・ふるまってきました。「あなたがたは」・・・知っています。そして今「私は」・・・エルサレムに行きます。

このような言葉遣いをパウロは普通しません。ミレトスの説教は、司牧的な説教ですから、当然パウロと共同体の 3 年間の歳月の出来事、神がどのように導いてこられたのか、人々との関わりを反映しています。そこで、この箇所は**司牧の究明(道理や真理を追求して明らかにすること)**をするのに**最適な箇所**と言えます。ここにはパウロにとって大切と思われたこと、共同体に対するパウロの働きを特徴づけるものがあります。このような前提でこの説教を見ていきます。

私たちが取り上げたいのは「自分をまったく取るに足りない者と思い、涙を流しながら・・・主にお仕えしてきました」(20:19) という、教会にとっていつの時代にも大切な司牧的態度を強調する一節です。

## 共にあること

「アジア州に来た最初の日以来、わたしがあなたがたと**共に**どのように過ごしてきたかは、よくご存じです」という導入で、パウロは 3 年のエフェソでの自分の使徒職をまとめています。自分が何をしてきたか説明する必要がないので体験に訴えています。

この導入のセリフからも、パウロが共同体と一体となり、親しい間柄だった様子を汲み取れます。「私はあなたがたと共に過ごし、あなたがたはわたしを知っています」と言えたので、改めて自分を推挙する必要がなかったのです。彼は自分自身を「人々の間にいる者、皆がよく知っている者、福音を証しする者」とまとめています。「共にある」「交わる」「共に生きる」ことをパウロは**大事にしました**。パウロは、人々が自分を模範と仰いでいることを自覚し、言葉だけでなく行動でも責任を果たしました。「この 3 年間、私が話したことを覚えていますか？」とは言わず「わたしがあなたがたと共にどのように過ごしてきたかは、よくご存じです。」と述べています。エフェソの人々は、パウロが話し上手かより、どんな人物か、どのような生き方をしているか観察してきました。そして、彼は仕えながら過ごしてきました。

## 主にお仕えしてきました

共同体でのパウロは「自分をまったく取るに足りない者と思い、涙を流しながら・・・主にお仕えしてきました」で表現されます。パウロは主に仕えることを1番にしました。人々も彼を共同体の奉仕者としてではなく、キリストの奉仕者と見ていました。私たちは「奉仕」というと「教会」「教区」「人々」への奉仕と理解します。けれども新約が奉仕について話すときは「キリスト」との関わりにおける奉仕です。パウロは「私自身は、イエスのためにあなたがたに仕えるしもべなのです」（Ⅱコリ4：5）と語っています。

ですから、司牧者はまずキリストご自身への奉仕に献身しなければなりません。こうしてはじめて教会と人々への奉仕ができます。

「キリスト以外の誰に気に入られようとする必要も感じない」というパウロの自由さを見習いましょう。共同体は、パウロがそこにいるのは、自分を喜ばせたり、期待に応えるためではなく、キリストに仕えるためだ、と心得ています。

## 涙ながらに

私たちが説教を締めくくるなら「熱心に」「情熱を込めて」「知恵を尽くして」「勇気を持って」「粘り強く」などの表現を使うでしょう。パウロは自分の体験から私たちとは違う表現を使いました。「涙ながらに」「謙遜の限りを尽くして」と言います。その理由を尋ねてみましょう。

これが別れの言葉であることが前提です。新しい重大な使命に向かって旅立つ別れではありません。彼を待っているのは明らかに迫害と苦難です。過去の苦難を思い起こし、また未来の苦しみが始まることを予想しています。けれども、そのようなことを越えて、主への仕え方として「謙遜と涙」が強調されています。これがパウロの体験を表現するシンボリックな“しるし”です。パウロの生涯には、辱め、試練、陰謀、苦難、そして涙がつきまといました。心に感じるままに自己紹介しています。

彼の言う謙遜と涙をより理解するために、エフェソでの使徒活動を考察しましょう。涙については他でも触れています。

### 使徒書 20：31

「だから、わたしが三年間、あなたがた一人一人に夜も昼も涙を流して教えてきたことを思い起こして、目を覚ましていなさい。」 愛情を込めて確信に導こうとする中で流された涙です。

### Ⅱコリ 2：4 では手紙で

「私は、悩みと愁いに満ちた心で、涙ながらに手紙を書きました」とあります。涙を流すのは極限状態のことです。そんなに簡単に涙する人ではなかったでしょう。それでも、張り詰めた緊張、ひどい困難に見舞われて人前でも涙が溢れていました。

このような記述は、パウロが司牧の務めをどれほど感情を込めて行ってきたかを思い知らせてくれます。パウロは、冷たい役人や、効率的に物事を考えるタイプとは正反対です。

パウロは激しい感受性をもって物事に関わりました。そのため、深い喜びにも出会いました。

### I テサロニケ 3：9

「私たちは、神のみ前で、あなた方のことで喜びにあふれています。この大きな喜びに対して、どのような感謝を神に捧げたらよいでしょうか。」

### II コリ 7：4

「わたしはあなたがたに厚い信頼を寄せており、あなたがたについて大いに誇っています。わたしは慰めに満たされており、どんな苦難のうちにあっても喜びに満ちあふれています。」

激しい苦痛は深い喜びや感動によって償われました。私たちは、体験からこのことを知っています。多く愛し多く苦しむ人は多く楽しみ、少ししか愛しも苦しむもしない人は楽しむことも少ないのです。

パウロが与えてくれる司牧者像は、愛情を込めて深く関わる姿です。一通りのことを広く浅くではなく、非常に深く愛しました。一人一人がパウロにとって深い悲しみや涙、あるいは大きな喜びでした。「涙を流しながら・・・主にお仕えしてきました」その姿が、人々の目に焼き付きました。

### 自分をまったく取るに足りない者と思

ここでなぜ、パウロはこのような表現を司牧者の基本的態度として強調したのか考えます。「取るに足りない」と訳されているギリシア語のメタ・パセス・タペイノフロシネスは、態度よりも状態を示す言葉です。「あらゆる辱めをもって」と理解できます。マグニフィカトの中でマリアが「主は身分の低いこの主のはしためにも目を留めてくださった」も、この意味で理解すべきです。「取るに足りないこと」「卑しさ」「小ささ」を意味します。パウロは、司牧活動をしながら、主に仕えていた謙遜な態度を表現しています。

「謙遜」の反対は、マグニフィカトの中で「神は思い上がる者を打ち散らし」と言われている「思い上がり」です。「思い上がった者」とは自分を何者かと信じ込み、自分中心に物事が進むと思ひ込み、他人は身を低くして奉仕すべきだと思ひ、それを当然のことと思って感謝もしない人です。パウロは、このような態度を強く非難しています。「高ぶらず、身分の低い人と交わりなさい。自分を賢い者とうぬぼれてはなりません」(ローマ 12：16)と戒めています。

無知であるのをわきまえることは、特に神との関わりで認識することは特に大切です。「私たちはどのように祈るべきか、何を願うべきかさえ知らないのです。」(ローマ 8：26) 私たちが「よく祈れないのです」というのは「祈るすべを知っている」と自惚れて祈り始めるからです。本当なら「私は祈ることができません。祈ることができないのを知っています」と言うべきです。そしてこれはもう祈りです。なぜかと言うと、求めるべき聖霊に場を開けているからです。

パウロが司牧的働きを特徴付ける態度としての謙遜には3つの側面があります。

## 社会的な面：物腰と態度

社会的な面とは、1つは要求がない(無報酬)ということです。もう一つは、他者への気配りです。パウロはきっと「私はあなたがたに何も要求はせず、自分のために特別なことを何も望まず、あなたがた一人ひとりに気を配って過ごしてきました」と言うでしょう。

### テサロニケの手紙にこうあります。 I テサ 2：4～8

「わたしたちは神に認められ、福音をゆだねられているからこそ、このように語っています。人に喜ばれるためではなく、わたしたちの心を吟味される神に喜んでいただくためです。あなたがたが知っているとおおり、わたしたちは、相手にへつらったり、口実を設けてかすめ取ったりはしませんでした。そのことについては、神が証ししてくださいます。また、あなたがたからもほかの人たちからも、人間の誉れを求めませんでした。わたしたちは、キリストの使徒として権威を主張することができたのです。しかし、あなたがたの間で幼子のようにになりました。ちょうど母親がその子供を大事に育てるように、わたしたちはあなたがたをいとおしく思っていたので、神の福音を伝えるばかりでなく、自分の命さえ喜んで与えたいと願ったほどです。あなたがたはわたしたちにとって愛する者となったからです。」

謙遜とは、何のてらいもない愛情や心遣い、配慮の行き届く人ざわりの良さです。パウロは神の恵みによってそのような者であったと感じ、司牧者の模範だと自覚していました。

**社会的徳としての謙遜**は、洗練、清廉、慎み、礼節、単なる見せかけでなく人の心を捉えるような、司祭にふさわしい上品さを伴います。社会であまり価値を認められていない人々にとって、自分がとても大切にされていると感じる時ほど、感銘を受けることはありません。

パウロに関わったキリスト者の多くは奴隷で、過酷な待遇を受け、蔑まれ、無視されるのに慣れていました。このような人たちにとって愛される体験が、どういうことを意味したか容易に想像できます。きっとパウロの姿は衝撃的だったでしょう。

## 個人的な面：自分についての自覚

個人的な面とは、人柄としての謙遜、率直な自己評価です。何度かパウロは、自分の弱さやもろさが、神の前での自分を悟らせてくれたと語っています。

### I コリ 15：8～9 には

「そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました。わたしは、神の教会を迫害したのですから、使徒たちの中でもいちばん小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者です。」とあります。

パウロは誠実にこう語っているので、キザっぽさはありません。自分についての判断の明るさです。この判断とは、自分のもろさや貧しさを体験して身についた処し方です。謙虚に、自分から離脱して、穏やかに、罪意識なく、平和に自分について考えることを学んだのでした。

## II コリ 1：8～9

「兄弟たち、アジア州でわたしたちが被った苦難について、ぜひ知っていてほしい。わたしたちは耐えられないほどひどく圧迫されて、生きる望みさえ失ってしまいました。わたしたちとしては死の宣告を受けた思いでした。それで、自分を頼りにすることなく、死者を復活させてくださる神を頼りにするようになりました。」

一部の信徒につまずきを与えかねない危険をおかしてこう語るパウロに驚きを感じます。パウロは試練を適切に生きるすべを身につけていきました。これは、若い人には到底およびもつかないレベルです。小アジアで苦難に直面したパウロが、もし自分の弱さを認める代わりに、あらゆることを罵ったらどうなっていたでしょう？ 試練から何も得られなかったでしょう。「生きた謙遜」を痛みの中で身につけたからこそ、生涯を通して、本当の牧者に徐々に成長できました。

## 神との関わり方

I コリ 4：7 パウロは神のみ前で誠実に生きたのでこう言えました。

「あなたをほかの者たちよりも、優れた者としたのは、だれです。いったいあなたの持っているもので、ただかなかったものがあるのでしょうか。もしいただいたのなら、なぜただかなかったような顔をして高ぶるのですか。」

「謙遜」は人々の心を捉えるパウロの一つの才能ですが、謙遜な態度の奥には創造主であり、所有者でもある主、慈しみの与え主である神への感謝がありました。神のみ前にパウロは一介の貧しい罪びと、恵みと慈しみを受ける者でした。

パウロが語ることばは、彼から出たものではなく神のことばでした。手紙にある「ことば」は、神から賜物として与えられたのです。使徒的熱意さえパウロのものではなく、彼のうちに生きるキリストによって与えられたものでした。

パウロの謙遜さの奥にキリストが透けて見えるのです。パウロが知り、理解したキリスト、辱められたキリストの姿です。キリストは、石をパンに変えたり、神殿の塔の上から飛び降りて人目を引くことはしませんでした。むしろ、すべての民の僕を選んだキリストが、パウロを通して透けて見えるための謙遜さでした。

パウロの謙遜さは、彼が受け入れ、自分のうちに生きているキリストをあらわす謙遜さです。

だからパウロは、主が仕えられたのと同じように主にお仕えできたのです。キリストは全く謙遜に仕えられました。その僕であるパウロも、先生であるイエスと同じように謙虚に、柔和に穏やかに権威を行使できました。

司牧の権威は、キリストの柔和に土台を置いています。だから、場合によってはパウロのように、厳しく断固とした態度も取れるのです。自分を守る口実に基づかないで、神のみ前での立場をはっきり人々に示しました。

私たちはこのような理想に程遠いことを自覚して、黙想しなければなりません。主への奉仕の中に、自分の願いや嗜好を挟んではいけません。パウロのように清めていただく必要があります。キリストに従うことは非常に難しい務めです。

目標からはまだまだ程遠いことを自覚し、これを務める恵みをマリアの取り次ぎで願いましょう。神はマリアの謙遜に目をかけてくださったのですから。神の恵みによってマリアの前に自分を置き、足りなさを認め、私たちのうちに生きておられるキリストの力が発揮できるように願いましょう。私たちが彼に似た者としてくださるよう祈りましょう。

## 振り返りの質問

Q. 生涯が終わりに近づくと「決別の言葉」はどのようなものになるのでしょうか？ パウロのミレトスでの説教と重なるのでしょうか？

Q. パウロの「神の前での謙遜」と、日頃の自分の態度を比べてみましょう。 重なる点、異なる点は思い浮かぶのでしょうか？

Q. わたしは誰に仕えたのでしょうか？ 教会の具体的な奉仕でしょうか？ パウロのように純粋に「主に仕えて」きたのでしょうか？ 何かに固執したり、振り回されてなかったのでしょうか？

## 6. 回心と断絶

パウロの生涯でとても暗い出来事から考えます。バルナバとの断絶です。人生の終わりに「心に傷となっていることは何ですか？」とパウロに質問したらきっと「バルナバとの断絶」と答えるでしょう。投獄や39回にも及ぶ鞭打ちよりも彼には痛い体験でした。

手紙の中で、バルナバとの仲違いについて一度も触れていません。しかし、パウロにとってはとても大きなことでした。このような出来事は、あらゆる時代の教会、私たちの生活にも起こりうることです。私たちも心の目を開けるように、主に願いましょう。

主イエスよ、聖人たちが生涯の中で、よく意味が理解できないことに会うのをご存知です。すべて分からせてくださいとはお願いしませんが、一部でも理解できますように。また、分かったことをきっかけに愛する力が引き出されることを願います。霊の力が私たちに働きますように。主の御母マリア、理解できない時にはせめて愛することができるようにしてください。私たちに照らす火である聖霊によって「闇」に打ち勝てますように。私たちの主、イエス・キリストによって。アーメン

次のことを問いながら話を進めましょう。

### バルナバとは誰でしょう？

初代教会の一人の偉大な人物。恐らく直接主に出会うことはありませんでしたが、最初に使徒たちの言葉を信じた者たちの一人です。ペトロ、アンデレ、ヨハネ、ヤコブが信頼を寄せるほどの人物でした。自分の所有物を全部売り払った最初の人物です。

### 使徒書 4 : 36~37

たとえば、レビ族の人で、使徒たちからバルナバー—「慰めの子」という意味—と呼ばれていた、キプロス島生まれのヨセフも、持っていた畑を売り、その代金を持って来て使徒たちの足もとに置いた。

まだ、キリスト者の共同体が少人数で小さな力しかなかった頃に、全てを捨ててキリストと使徒たちについて行こうとしました。そのために「励ましの子、慰めの子」と呼ばれました。英知に富み、信頼の雰囲気があるので、人が喜んで彼と友だちになるようなタイプでした。使徒書を見ると、彼が大事な役割を任されていることがわかります。11章に彼の名が度々登場します。エルサレムから派遣され、アンティオケアのキリスト教共同体を正当なもの認めました。そして、ここから始まり西方のギリシア文化圏と小アジアのキリスト教が生まれました。もし、彼がいなかったら、キリスト教は長い間、エルサレムのユダヤ主義キリスト者に縛られていたかもしれません。バルナバは、エルサレムを安堵させ、アンティオケアを励ますことで分裂を回避させました。両者を仲介する、初代教会にはなくてはならない人物でした。

### 使徒書 11 : 23~24

バルナバはそこに到着すると、神の恵みが与えられた有様を見て喜び、そして、固い決意をもって主から離れることのないようにと、皆に勧めた。バルナバは立派な人物で、聖霊と信仰とに満ちていたからである。こうして、多くの人が主へと導かれた。

パウロにとってバルナバとは何者だったのでしょう？



非常に大切な人でした。教会に受け入れてもらうにはアナニアの世話になりましたが、その後のことは、みなバルナバのおかげです。タルソスでの苦しい時期、バルナバはパウロを受け入れ、理解し支えてくれました。使徒職の先生であり、使徒職に招き入れてくれました。

### 使徒書 9：26～27

「サウロはエルサレムに着き、弟子の仲間に加わろうとしたが、みなは彼を弟子だとは信じないで恐れた。しかしバルナバは、サウロを連れて使徒たちのところへ案内し、サウロが旅の途中で主に会い、主に語りかけられ、ダマスコでイエスの名によって大胆に宣教した次第を説明した。」

「連れて」と訳されているのは嵐の湖で沈みそうになったペトロをつかんだイエス（マタイ 14：31）の時に使われたギリシア語のエピラボメノスです。エルサレムで途方に暮れているパウロを思い浮かべてみましょう。皆が目の前で扉を閉めてしまい、宿るところもありませんでした。そんな時にバルナバが近寄って言いました。「私と一緒にいらっしやい。私が紹介してあげましょう」と声を掛けてくれました。バルナバのおかげで、パウロの前に扉が開かれました。

### 使徒書 9：28

「それで、サウロはエルサレムで使徒たちと自由に行き来し、主の名によって恐れずに教えるようになった」バルナバの仲立ちでパウロは宣教の場を与えられます。

バルナバは、その後もアンティオキアの共同体で預言者たちの筆頭に挙げられています。

### 使徒書 13：1

「アンティオキアでは、そこの教会にバルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、キレネ人のルキオ、領主ヘロデと一緒に育ったマナエン、サウロなど、預言する者や教師たちがいた。」

### 使徒書 11：25～26

「それから、バルナバはサウロを捜しにタルソスへ行き、見つけ出してアンティオキアに連れ帰った。二人は、丸一年の間そこの教会と一緒にいて多くの人を教えた。このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになったのである。」

行間に、バルナバとパウロの素晴らしい協力関係が読み取れます。バルナバが第一人者です。パウロは新参者ですが、バルナバは彼を評価していました。彼らの活動で目覚ましい共同体が誕生しました。キリストを信じる人たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになったのはこのアンティオキアでのことでした。歴史的に注目される共同体を作りました。パウロにとってバルナバとはこういう恩義のある人でした。

やがて、二人の序列に変化が生まれます。順番は決してどうでもいいものではありません。「パウロとその一行は、パフォスから船出してパンフィリア州のペルゲに来た」(13：13) この時点で

は、パウロが主役に躍り出ています。最初の宣教旅行の間に進んだ心理的变化と役割の変化を汲み取ることができます。

そして、残念ながら役割の交代が決定的になります。13章に出てくる旅行中、最初の説教はバルナバではなくパウロがしています。「そこで、パウロは立ち上がり、手で人々を制して言った。『イスラエルの人たち・・・』」(13:16) やがてマルコは一行から別れて引き返します。

15章では、まだ二人は協力関係にあります。二人は心を合わせ、回心する異邦人に割礼を授けるべきであるというユダヤ主義者の主張に対して行動していました。しかし、パウロの方が先に名前が出てきます。

### 一体何が起きたのでしょうか？

15章の終わりに分裂の悲劇が起きます。エルサレムで使徒会議がありました。アンティオキアに下った彼らはしばらくそこにとどまっていたましたが、パウロは再び宣教旅行に出ようとします。

「数日の後、パウロはバルナバに言った。「さあ、前に主の言葉を宣べ伝えたすべての町へもう一度行って兄弟たちを訪問し、どのようにしているかを見て来ようではないか。」(15:36)

今度は、前のように共同体がバルナバとパウロを派遣するのではありません。パウロが小アジア全体の活動の責任を感じ、兄弟たちを再び訪問したいのです。

### 使徒書 15:37~41

「バルナバは、マルコと呼ばれるヨハネも連れて行きたいと思いました。しかしパウロは、前にパンフィリア州で自分たちから離れ、宣教と一緒に行かなかったような者は、連れて行くべきでないと考えた。そこで、意見が激しく衝突し、彼らはずいに別行動をとるようになって、バルナバはマルコを連れてキプロス島へ向かって船出したが、一方、パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて、出発した。そして、シリア州やキリキア州を回って教会を力づけた。」

何が起きたのでしょうか。同伴する協力者についての意見の相違です。バルナバにとって適当な人物がパウロにとってはそうではなかったのです。面倒なことにバルナバはマルコの従兄弟だったので、彼を弁護する気持ちがあったでしょう。

パウロは原則にこだわって頑なになり「意見が激しく衝突し、彼らはずいに別行動をとる」(15:39) ことになりました。恐らく何日も論争は続き、共同体は和解させようと努めましたが物別れに終わりました。そして、めいめいが別行動をとる方がいい状態になってしまいました。

「激しい衝突」と訳されているのは「パロクシモス」です。使徒書 17:6 でアテネの町が偶像に満ちているのにパウロが憤慨した時にこの言葉が使われています。コリントの第一の手紙の 13:5 で愛の特質を述べる時、パウロは「愛はいらだたず」と書いていますが、このときに「パラクシモ

ス」を使っています。パウロがこれを書いたとき、自分もかつて極端な状態に陥って自制できなかったことを思い出し、自分を責めているようにも思えます。

ガラテヤの信徒への手紙にはこうあります。「バルナバさえもペトロたちの見せかけの行いに引きずり込まれてしまった」(2:11~14 参照)

パウロはユダヤ化を主張する人と手を切る方針でいましたが、バルナバはユダヤ教出身の教会とも友情を温めている人でした。ユダヤ化主義者(律法を重んじる)たちと絆を断ち切りたくない、と考えていました。二人の断絶にはこのような背景もあったでしょう。

### その結果は？

バルナバのおかげで信徒の交流に仲間入りをさせてもらったパウロが、バルナバとマルコを信頼できなくなりました。バルナバの味わった痛みは相当でしょう。友としても拒まれた感じを受けたでしょう。パウロの悪意によるものではなかったのですが、事はそのように進みました。このエピソードの後、バルナバは消息を絶ちます。初代教会の第一人者はその跡を残していません。パウロはのちに、I コリで立派な人物としてバルナバを想起しています。「わたしとバルナバだけには、生活の資を得るための仕事をしなくてもよいという権利がないのですか。」(I コリ 9:6) と短く語っています。

のちにパウロはマルコと和解し、マルコがバルナバの従兄弟であることも記しています。

### コロサイ 4:10

わたしと一緒に捕らわれの身となっているアリスタルコが、そしてバルナバのいとこマルコが、あなたがたによろしくと言っています。このマルコについては、もしそちらに行ったら迎えるようにとの指示を、あなたがたは受けているはずです。

これを読むと、パウロが「あの一時、私が受け入れなかったバルナバの」と言っているように聞こえます。

これらの短いバルナバの言及を除けば、バルナバについて私たちが知っていることは伝承だけです。故郷のキプロス島に帰って以来、もはや宣教旅行もすることなく生涯そこにとどまりました。豊かな能力を秘めていたのに小さな地域に閉じこもる結果になりました。

ホルツネルの『パウロ』にはこうあります。(表記を改めています)

「人間的見地からしたら、確かにバルナバの方がより人情的です。パウロはマルコの一件をあまりに厳しく裁きすぎたかもしれない。なぜなら、後年、マルコは第2福音書の筆者として、有能な働き手であることを証明したからです。パウロはバルナバに対して過酷だったようだ。パウロの生涯に光をもたらしてくれた人こそ、バルナバであり、パウロはバルナバに相当感謝すべきことがあっ

たようだ。しかし、人間は一步一步知識が進んでいくように、パウロも、おもむろにしかキリストの似姿にはなっていけなかったのだ。彼は、短気と激しい衝動を、いつも抑えられたわけではなかった。・・・後年、パウロはしばしば、バルナバ以外は誰も自分を信じてくれなかった頃、特に、バルナバがタルソスにやってきて、アンティオキアへ来るように勧めてくれた、あの忘れられない日のこと・・・あるいは、打たれて傷まみれになって溝の中に横たわっていたところへ、心臓の鼓動を聞こうとして屈み込んだバルナバの顔が見えたあの悲痛な日のこと・・・などを回顧したに違いない。こうした友情の絆は、心を裂くような思いなしには、切り得るものではない。」（平塚武訳 エンデルレ書店 P182～183）

パウロは、後になってバルナバの仲裁能力、物腰の柔らかさ、中庸のセンスなど事態を打開する力のあった彼のことを惜しんだでしょう。しかし、パウロはこの道を歩まねばなりません。なぜなら、あの苛立ちの真相は誰にもわからないからです。物別れした後のパウロは、こういう困難や問題を抱えて生きることになります。

**パウロはこの断絶をどのように生きたのでしょうか？**

パウロはバルナバを失い断絶に苦しみました。そして、この出来事もダマスコでの最初の示幻に接した時の洞察を深めるのに役立ちました。

「主だけが唯一の完全な友、いつも変わらぬ、ただ一人忠実な方。自分の奥底まで理解してくださる方、決して自分を見捨てない方」

私たちが愛情深く気性の激しいパウロの心を知れば知るほど、**彼のキリストに対する徹底的な愛がどのように育っていったかわかる気がします。**今日、私たちはパウロの手紙の素晴らしさに心を打たれますが、これらは苦悩の淵からしか悟れませんでした。また、主は本当にすべてである、という悟りからしか生まれませんでした。主は私たちを創り、私たちを知り尽くしておられます。人間の友情がどんなに美しいものであっても「私たちの主キリスト」の前には色あせてしまいます。

**フィリピ 3：8～11**

そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくたに見なしています。キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです。わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります。わたしは、キリストとその復活の力を知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです。

**フィリピ 1：21 「私にとって、生きるとはキリストである」**

**ローマ 8：35 「誰が、キリストの愛から私たちを引き離せましょう」**

さまざまな出来事を経ながら、パウロは次第に神のあわれみによって、イエスのなさり方を的確に判断できるようになります。使徒職を自分のわざと見る姿勢から離れて神のわざとして使徒の働きを見るようになります。

パウロの中で、徐々にキリストの王国（み国）と自身の活動を一致させるようになります。パウロにとって本質的なことは、キリストであることを悟りました。彼のするすべてのこと、情熱を込める活動も、弁舌をふるった説教もキリストがパウロの中に生きていなければ無に等しいのです。キリストから離れることがないのが、一切の根です。キリストという裏切られない友情を見つけることで、困難にあっても共同体、協力者たちとの友情を築いていきます。

私たちの使徒的歩み、司牧体験はキリストとの友愛に拠っていることをますます悟っていきましょう。

## 振り返りの質問

Q. あなたにはとても恩義を感じている人がいるでしょうか？ どのような恩義でしょうか？

Q. これまでに人との断絶がありましたか？ それはどのような経緯だったのでしょうか？ 今となっては自分の至らなさを感じるのでしょうか？

Q. パウロとバルナバの関係の変化から学ぶことがあるでしょうか？

## 7. パウロの変容

パウロの生涯の苦悩がその後、内的な清めを経てどう変化したかを考えます。そして、司牧者が果たす変容について黙想します。この黙想の恵みとして、パウロを知ることによってキリストを知り、使徒の顔に輝いたキリストの栄光が私たちにも反映されることを願いましょう。

バルナバとの断絶によるパウロの苦しみについて考えましたが、パウロの生涯にはコリントの信徒への手紙、ガラテヤの信徒への手紙で触れている共同体とのあつれきとも闘わなければなりませんでした。パウロは、孤独に陥ることが続きました。アンティオキアではペトロとも対立しています。あの時パウロは非常に当惑し、苦境にありました。これらを振り返って、私たちがまず心得ることは「こういうことに驚かないこと」でしょう。教会の歴史にもこのような衝突は生じます。司祭間の協力の難しさ、司祭と信徒の仲違い、これらは新約聖書にすでにあらわれています。これは1つの現実で、パウロと同じように、私たちが浄化されるように、諦めずに解決の道を探す必要があります。衝突が起きても驚かないで、むしろ、互いが理解に努め、成長することです。私たちが衝突するのは、神の栄光を思ってというより、自分のやり方・考え方に固執することが原因でしょう。起きている問題に神の慈悲の心が与えられるように、互いに学ぶことが大切です。

### 変容とは何を意味するのでしょうか？

この黙想は「変容」と名付けましょう。「祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた」(ルカ9:29)というキリストの変容に基づいています。

マルコは「イエスの姿が彼らの目の前で変わり、服は真っ白に輝き」(9:2~3)と記します。動詞は「メタモルフォテ 変形する」が使われています。「姿が彼らの目の前で変わり」と訳されています。この動詞は、パウロがコリントの信徒に宛てた手紙に、パウロや信徒がキリストの栄光を反映しながら体験する変容のプロセスを表現するときにも使われています。

#### II コリ 3:18

「わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。これは主の霊の働きによることです。」  
これは、私たちが今考えている変容(霊的成長による変化)のことです。

ギリシア正教会の典礼では、信徒が洗礼のとき受けるたまものを次第に統合していくことで変容することを意識しています。ご変容の祝日にはそのことも頭に入れましょう。

パウロの「変容」については、司牧が進展するにつれて彼の輝きと透明感が増したことを考えましょう。彼の書簡集を読むと、私たちは彼の魂の透明さに惹きつけられます。変容された彼の姿も人々を惹きつけ、使徒活動の秘訣の1つになりました。変容は、絶えない試練と苦しみ、主にすべてを明け渡した祈り、相手を信頼することで成し遂げられた、長い歩みの結果でした。

パウロの話ぶりや行動がキリストを透かし見せ、輝きました。また、神の恵みによって変容した司祭・シスター・信徒たちを知っています。私たちがパウロのように、苦しみ、労苦、神のたまものを通して輝きと透明度を増していくよう召されています。

私たちが変容するには何が必要でしょうか？ 牧者の理想を描くのに役立つかもしれませんが。パウロの変容の特徴をあげましょう。変容は私たちにとっても神のたまものですが、どうしたら実現するのでしょうか？

## 変容の心の姿勢

一番、闘争的な手紙を含めても、パウロの手紙に見られる特徴は**内的な喜びと平和**です。

### Ⅱコリ 7：4

「私は慰めに満たされており、どんな苦難のうちにあっても喜びに満ちあふれています。」パウロは、数多くの困難を満ちあふれる喜びと並べています。それが無理をしたり、理想化したものでもありません。

### Ⅱコリ 4：7

「ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。」

パウロは、この並外れた喜びが神からくるもので、自分の力ではとてもなしえないことをわきまえています。これは変容の特徴で、パウロの性格の良さでも、資質でも、努力の結果でもありません。

### Ⅱコリ 4：8～10

わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。わたしたちは、いつもイエスの死を体にまっています、イエスの命がこの体に現れるために。

これは問題のない、安定した状態での言葉ではありません。たくさんの苦しみ、葛藤を抱えながらも恵みによって清められた後にいただく本物の喜びです。パウロは少し精神的に細かい人でしたから、落ち込んだり失意に沈む時がありました。けれども生涯の間に、少しずつ、落ち込んだ時にこそ、自分の中に何かもっと強いものがあらわれることを体験していきました。

さらに、この喜びは、周囲のため、共同体のための喜びで個人のものではありません。心を砕いているあちらこちらの共同体のためです。

「私たちは、あなたがたの喜びのために協力する者です」（Ⅱコリ 1：24）と書いています。共同体が理想的で完全だった、と考えるのは間違いです。パウロは共同体の運営が難しいときに、喜びを感じることができました。これは、目の前にある出来事を超える信仰の視野がパウロに与えられていたからです。自然を超越するたまもの、聖霊の力のあらわれです。

心の姿勢の2番目にあげられるのは**感謝する能力**です。

自分が世話した信徒たちに喜びをもって御父に感謝するように（コロサイ 1:12）勧めています。  
**喜びと感謝**を併せるのがパウロの特徴です。

一部を除けば、パウロの手紙は感謝の祈りで始まっています。それも、形を整えるためではなく心に感じていることを表現しています。また、手紙には実りのない非難は見られません。叱責はしていますが、挫折感はありません。

パウロには、変容するためのたまものとして、善（良いところ）を見つける才能がありました。共同体の良さをたたえた後に、叱責の言葉が出ます。改宗したばかりの貧しい信徒からも驚くべき大きな恵みを見いだすことができ、神をたたえていました。成熟した牧者は、周りにある善を認め、それを素直に表現します。

内的な姿勢の3番目は**賛美**です。

パウロには、祝福というユダヤの伝統を引き継いだ素晴らしい賛美があります。

### エフェソ 1:3

わたしたちの主イエス・キリストの父である神は、ほめたたえられますように。神は、わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました。

パウロの手紙は賛美にあふれ、神への嘆願へとつながります。パウロは一番苦しい時期に次のように語っています。

### II コリ 1:3~4

「わたしたちの主イエス・キリストの父である神、慈愛に満ちた父、慰めを豊かにくださる神がほめたたえられますように。神は、あらゆる苦難に際してわたしたちを慰めてくださるので、わたしたちも神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができます。」

私たちは、果たしてこのパウロの言葉を自分の深いところで感じるのでしょうか。「わたしの」「わたしたちの」という表現が使えるか、心の中を見てみましょう。

私たちが神に願う恵みは、復活されたイエスによって変容させられたパウロの姿勢に自分たちが倣うことです。悪魔はいつも、私たちが現世的な生き方に陥るように、絶えず誘っています。わびしい生活をしていたら現実からの逃避を求めてしまいます。悲しみに直面せずに済むために、どんな快樂でも追い求めてしまいます。そうならない恵みを願いましょう。

### キリストに変容していただいたパウロの外的な姿勢

1番にあげられるのは、うむことを知らずに立ち上がる姿勢です。回心の最初の日からそうでした。ダマスコで説教しましたが、そこから逃亡を余儀なくされました。エルサレムに行き、説教しますが、体良く追い払われます。タルソスに戻り、摂理の呼びかけがあるまでそこにとどまります。宣教にお呼びがかかると、過去の恨みを忘れて再び出発します。パウロの宣教旅行は、やり直しが尽



きませんでした。投獄、石投げ・・・パウロの生涯はこのような出来事の連続でした。また始めからやり直すことばかりでした。（使徒 14：19～21 参照）

この再起する能力は、人間の力ではありません。人は自分の力だけでは何度か挫折するとくじけてしまうからです。私たちはパウロのように疲れを知らない人間ではありません。彼だってそのような特質をもとから持っていたわけではありません。

愛はうむことがありません。それは神の愛だからです。「私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれています」（ローマ 5：5）パウロの行動は上から注がれたたまものの力によります。パウロの変容は、彼の弱さの中に入り込んで働く復活の主のおかげです。

外的な姿勢の2つ目は、精神の自由です。無理に理想に合わせたり、意志の力で何とかするのはなく、内にある豊かさが行動にあらわれました。大胆かつ自由な態度が取れました。人間的に考えれば、ユダヤ人キリスト者たちの要求を受け入れテトスに割礼を受ける方が賢明だったろう、と思える時にパウロはこう語ります。

### ガラテ 2：5

「福音の真理が、あなたがたのもとにいつもとどまっているように、わたしたちは、片ときもそのような者たちに屈服して譲歩するようなことはしませんでした。」

パウロは、周囲の意見や時代の流れからも自由でした。孤立状態に陥るかもしれない極限の中でも自由を発揮できたのは、自分のうちにある富が他人の意見とは比較できないと、信じていたからです。

パウロのこの力が、ペトロにさえ対抗させました。

「そして、ほかのユダヤ人も、ケファと一緒にこのような心にもないことを行い、バルナバさえも彼らの見せかけの行いに引きずり込まれてしまいました。」（2：13）

「見せかけの行い」とパウロが呼ぶのは、両派の間を取り成そうとすることです。パウロはこれを受け入れず、抵抗しました。こうできたのも、全面的にキリストに従う、奴隷として、僕として従う、という自覚からの自由です。パウロは、キリストの僕である自意識から、周りの人間の意見から自由になっていました。

この自由は厳しい形の奉仕を求めます。

### ガラテヤ 5：1～13

「この自由を得させるために、キリストはわたしたちを自由の身にしてくださったのです。だから、しっかりしなさい。奴隷の軛に二度とつながれてはなりません。ここで、わたしパウロはあなたがたに断言します。もし割礼を受けるなら、あなたがたにとってキリストは何の役にも立たない方になります。割礼を受ける人すべてに、もう一度はっきり言います。そういう人は律法全体を行う義務があるのです。律法によって義とされようとするなら、あなたがたはだれであろうと、キリストとは縁もゆかりもない者とされ、いただいた恵みも失います。わたしたちは、義とされた

者の希望が実現することを、“霊”により、信仰に基づいて切に待ち望んでいるのです。キリスト・イエスに結ばれていれば、割礼の有無は問題ではなく、愛の実践を伴う信仰こそ大切です。

あなたがたは、よく走っていました。それなのに、いったいだれが邪魔をして真理に従わないようにさせたのですか。このような誘いは、あなたがたを召し出しておられる方からのものではありません。わずかなパン種が練り粉全体を膨らませるのです。あなたがたが決して別な考えを持つことはない、わたしは主をよりどころとしてあなたがたを信頼しています。あなたがたを惑わす者は、だれであろうと、裁きを受けます。兄弟たち、このわたしが、今なお割礼を宣べ伝えているとするならば、今なお迫害を受けているのは、なぜですか。そのようなことを宣べ伝えれば、十字架のつまずきもなくなっていたことでしょう。あなたがたをかき乱す者たちは、いっそのこと自ら去勢してしまえばよい。兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。

「仕えなさい」（ギリシア語では奴隷でありなさいという意）という言葉が「互いに」と結ばれている数少ない例です。キリストの奉仕の絶対性は兄弟の奴隷になるのを恐れないほど、人間を自由にします。この自由は、パウロの使徒職の特徴である「謙遜の限りを尽くす源」です。

### パウロの変容は牧者の変容の模範

変容に至るにはどうしたら良いでしょうか？ 何か具体的な条件があるのでしょうか？

パウロがキリストの心に沿った牧者になり始めるのは、15年にわたる労苦と苦難を経てからです。そうなるのは、神のたまものによるものでパウロが獲得したものではありません。神が慈しみによって私たちを変容させてくださると認めることが第1です。

神のたまものを受ける第1の方法は、十字架につけられたキリストのみ心を観想することです。神のみことばと聖体の2つの食卓に誠意をもって近づくことです。2つの糧は、私たちを養い、救いの歴史の中に組み入れてくれます。

パウロと同じように、私たちにとっても観想することが変容の道です。パウロは、死んで復活されたキリストの観想という、絶え間のない長い祈りを実践していました。

また、マリアの取り次ぎによっても変容されます。マリアは、信仰の輝きを保ち盛んにする方です。処女マリアは、慎ましくみことばを受け入れる私たちのモデルです。聖霊の刷新する力にいつも自分を開いていました。マリアは、みことばに聴き入る観想へと私たちを促してくれます。

司牧的な変容のたまものは、分かち合うこと、神からの光を見ている人を信頼しその人の肩に手を置くことでもいただきます。光を見た人の肩に互いに手を置き支え合うのは、交流による一致です。霊的指導やゆるしの秘跡がその場になるでしょう。互いが手をつなぎあう、心を開く機会を作りましょう。このような共同体の変容のための、実践的手段に何があるか追求しましょう。

変容のたまものは警戒も求めます。

「誘惑に陥れないように祈りなさい」 (ルカ 22 : 40)

「心は燃えても肉体は弱い」 (マタイ 26 : 41)

「目を覚ましていなさい。信仰に基づいてしっかり立ちなさい」 (I コリ 16 : 13)

このような警戒への招きは、変容への継続的な取り組みが難しいことを語っています。キリスト者、司祭、人はみな誰も終わりを全うする保証は持っていません。一番危険なのは、もはや用心など必要ない、と安心してしまうことです。新約聖書は、悪魔が私たちから、喜び・信仰・賛美を奪おうと死の瞬間まで誘うことを警告しています。この種の闘いに終わりがありません。疲れ、神経質、苛立ち、信仰が弱まる快樂にいつ陥るか分かりません。パウロも何回か警告しています。

このためにマリアの取り次ぎを頼りにしましょう。パウロと共に警戒できるように祈りましょう。司牧生活にある困難や苦しみ、幻滅にも関わらず、キリストに捕らえられて、神のみ手によって変容される恵みを願いましょう。

## 振り返りの質問

Q. パウロの内的姿勢、外的姿勢から学べるものはあるでしょうか？

Q. 喜び・平和・感謝・賛美を日頃感じているでしょうか？ あるいは仕事・課題をこなすことで精一杯でしょうか？

Q. 自分が変容（一回り成長できる）するためには何がテーマでしょうか？ 共同体にとっては何が大切でしょうか？

Q. 自分が警戒すべきなのはどのような点でしょうか？

## 8. パウロの受難とキリストの受難

福音書はキリストの受難の描写に、それまでに比べて多くのページを割いています。パウロについても、投獄、裁判、ローマでの牢獄生活に多くのページをかけています。

このことから、福音史家や初代教会が、キリストの受難とパウロの受難を重視していたことがわかります。福音史家たちは、キリストがメシアであり御父を啓示する方であったのは、受難においてだったと悟りました。パウロにとっても同じことが言えます。彼はとても雄弁で、説得力を持って説教をしました。しかし、投獄され、法廷に引き出され、牢から牢へと引き移されて自由を制限され、死の恐怖を味わった時にこそ、パウロはキリストを証しました。

この黙想で特に求めたい恵みは「私は、キリストとその復活の力を知り、その苦しみに与って、その死の姿にあやかりたい」（フィリピ3：10）という神秘的な言葉を理解することです。

パウロは受難のイエスを知りたいと願いました。私たちも、イエスの受難との神秘的・霊的一致、物理的にも受難に一致できること熱望します。

いつくしみ深い御父、あなたは、私たちにとってキリストの苦しみとの神秘的一致がとても大切なことをご存知です。そして、この一致がどんなに難しいかもご存知です。日頃の私たちの行動は、キリストの苦しみとは裏腹で、一貫性がなくどれほど遠いこともご存知です。ですからお願いします。私たちが、キリストの苦しみに与り、キリストを知り、その復活の力を知ることができますように、私たちの心を燃やしてください。悲しみの聖母マリア、聖パウロと心を1つにしてこの恵みを願います。私たちの主、イエス・キリストによって。アーメン。

この黙想では、**4つの問い**に答える形で進めます。

1. キリストの受難とパウロの受難は、どういう点が共通し、どういう点が違うのか？
2. キリスト者の苦しみとはどういうものか？
3. パウロは苦しみをどのように生きたか？
4. 私たちは苦しみをどのように生きるべきか？

#### 1. キリストの受難とパウロの受難は、どういう点が共通し、どういう点が違うのか？

キリストの苦しみのいくつかの段階を、パウロのそれらと比べてみましょう。3つの時に注目します。

##### ① キリストの逮捕とパウロの逮捕

###### ルカ 22：45～47

「イエスがまだ話しておられると、群衆が現れ、十二人の一人でユダと言う者が先頭に立って、イエスに接吻しようと近づいた。イエスは、「ユダ、あなたは接吻で人の子を裏切るのか」と言われた。イエスの周りにいた人々は、事の成り行きを見て取り、「主よ、剣で切りつけましょうか」と言った。

## 使徒 21：27～28

「パウロは誓願を立てた4人のユダヤ人たちと神殿にとどまって清めの期間が終わるのを待っていました。ところが「アジア州から来たユダヤ人たちが神殿の境内でパウロを見つけ、全群衆を扇動して彼を捕らえ、こう叫びました。『イスラエルの人たち、手伝ってくれ。この男は、民と律法とこの場所を無視することを、いたるところで誰にでも教えている。その上、ギリシア人を境内に連れ込んで、この聖なる場所を汚してしまった』」

都中は大騒ぎになります。群衆はパウロを神殿の外に引きずり出して門を閉め、パウロを殺そうとします。そこへ千人隊長が守備隊を率いて現れ、パウロを捕らえて二重の鎖で縛りました。これ以来、パウロの長い牢獄生活が始まります。

### キリストとパウロの受難の場面の共通点は何でしょうか？

どちらも逮捕の仕方が卑劣です。陰謀による逮捕、罠を仕掛けた逮捕です。イエスにとっては待ち伏せ、パウロも同様に敵が巧みに仕掛けたことでした。二人にとっての逮捕は、自分たちの民のために尽くしている時に起きました。イエスの場合は、祈りに耽っていた夜のことで、パウロは「供物を捧げて神殿で清めの式に与って欲しい」という同胞の要望を叶えようとした時でした。二人が献身的に奉仕しているときに捕らえられたのです。

### ② 法廷でのキリストとパウロ

イエスは、いろいろな法廷に引き出されました。最高法院、ピラトの法廷に出廷し、様々な罪名で告発されて尋問され、最初は応じますが、ある時点から沈黙されます。

パウロの裁判については詳しい記述があり、一連の長い弁明が記されています。使徒書 22 章の神殿の階段で行われた弁明、23 章の最高法院でのもの、24 章のフェリクスの前での弁明とフェストゥスの前での演説、26 章のアグリッパ王の前での弁明です。

パウロは、イエスの猿真似をしているわけではありません。神の霊が自分に宿っていることを自覚し、イエスの生涯から靈感を得て、自分の置かれた状況で確固たる態度で対処します。イエスの正義感、魂の高潔さに倣いますが、彼とは違った仕方、反対者を混乱させる方法で行動します。そして、自分を告発する者たちの間に口論を起こして最高法院を分裂させます。

どちらの裁判にも、一見もっともらしい主張の裏には、個人的な利害、正義への恐れ、野心が複雑に絡んでいます。イエスもパウロも、置かれた状況に身を委ねました。

### ③ キリストとパウロの肉体的、精神的苦しみ

パウロの苦しみは、牢に入れられている過酷な状況を推測する必要があります。けれども、彼はそれ以前に鞭打ちや石打ちにあつてかなり苦しんでいます。パウロは、肉体的・精神的苦しみ

をあたかも予期していたかのように伝えています。パウロは、精神的な苦しみ、特に孤独を強調しています。

キリストの精神的苦しみは、人間からまったく見捨てられたことだったでしょう。皆が逃げ去ってしまいます。ペトロだけが遠くから後をつけてきますが、やがて彼も主を否んでしまいます。イエスはいつも自分を支援する人たちに囲まれていましたから（私たちもそれに慣れていますが）、急に極端な孤独を感じたのでしょう。この孤独は「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」（**マタイ 27：46**）という叫びに表されています。神に捨てられたと感じる神秘的な体験によって、孤独は一層ひどいものになりました。この叫びにどのような意味するのか探ろうと、たくさんの方が書かれました。

ハンス・フォン・バルタザール(1905～88)が『復活秘義』（表現を改めています）にこう書いています。彼はあの叫びから出発して、イエスの聖金曜日、彼の魂を襲った闇と陰府への下降を解釈します。バルタザールは「私たちがキリストの受難を理解できるのは、聖人たちの苦しみを通してだ」と主張します。偉大な聖人たちが体験した闇、苦悩、見捨てられたと感じる悲劇を理解してはじめて、イエスが誰よりも先に孤独や苦悩を偲んでくださったことの断片を理解できるのです。

パウロの苦しみは生涯続いたでしょう。パウロは、自分の受難の最中に弟子たちに次第に見捨てられる体験をします。パウロほど、命がみなぎっていた人でも、疲れ、極限までの苦しみを味わって、心中を吐露しました。

## Ⅱ テモテ 4：9～11、14～16

ぜひ、急いで私のところに来てください。デマスはこの世を愛し、私を見捨ててテサロニケに行ってしまう、クレスケンスはガラテヤに、テトスはダルマティアに行ったからです。ルカだけが私のところにいます。マルコを連れて、一緒に来てください。彼は、私の務めのために役に立つからです。・・・銅細工師アレクサンドロは私にひどい仕打ちをしました。その仕業に応じて、主が彼に報いてくださることでしょう。あなたも彼には用心しなさい。彼は私たちの言葉に激しく逆らったからです。私の最初の弁明の際には、誰も助けてくれず、皆私を見捨てました。どうか、そのことで彼らが責められることがありませんように。

この最後の部分は、一番辛い表現です。私たちが見慣れているパウロとは違うパウロです。牢獄生活に打ちひしがれ、肉体的にも疲れているパウロです。確かに人生の下り坂のパウロのイメージです。孤独のうちに日々の苦難と闘い、ある種の悲観さを垣間見せています。

今起こっていることを告発して、将来の悪を予想しています。昔の希望・大胆さや情熱に満ちた調子から、暗く咎めるようなトーンに変わっています。今は疲れや、つのがってくる重荷・幻滅などを直視しなければなりません。パウロはこのような姿を見せることで、私たちにいろいろな試練で清められることを教えています。神はパウロに、完成の域の浄化に導こうとしています。



パウロに「あなたは神から捨てられたという、内的闇、荒み、霊の闇夜を体験したのですか？」と聞いてみることもできます。自叙伝からは、それを確かめることはできませんが、誰をも容赦しない悪の不気味な力について、パウロは何度か話しています。

バルタザールがイエスについて述べていることを考えると、パウロも信仰が闇に包まれる体験をしていたこととなります。以前持っていた神の豊かな体験・思い出だけを頼りに歩まなければいけなかったのでしょう。

### キリスト者の苦難はどういうものか？

小さきテレジア(1873～97)は、人生の末期にまったくの闇に覆われていました。神から素晴らしい賜物を受けて過ごしたのちに、理解できない状態に陥ります。彼女自身、それが名状しがたい魂の試練であり、語るのさえ恐れるものだったと述べています。

### 「幼いイエスの聖テレーズ」から 1961年製作の映画 女子パウロ

1896年聖木曜日から聖金曜日までにかけての夜、23歳になったテレーズは真夜中まで、ご聖体の前にとどまった後、修室に戻りました。

カルメル会の四旬節の厳しい断食を守りましたが、これほど元気に感じたことはかつてないほどでした。わずかな水とパンだけでその日から翌日まで過ごすことを喜んでいました。彼女の心にしみたその夜、ヨハネ福音書(13:1～)は次のように始まります。

「さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移るご自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。」

頭を枕につけたかと思うと間もなく、私は何か潮のようなものがこみ上げ、泡立ちながら口びるまでのぼってくるのを感じました。もしかしたら死ぬのかと思って、私の魂は喜びでいっぱいになりました。けれども、ランプはもう消してありましたので、幸福を確かめるのは朝まで待たなくてはなりません。待つほどもなく朝となり、目が覚めた私は窓に近づいてみますと、果たして私が思っていた通り血を吐いたことが分かりました。ああ、私の魂は大きな慰めに満たされていました。

しかし、この喜びは2日間しか続きませんでした。

「私の魂は濃い暗闇に包まれ、あれほど甘美だった天国への思いは、闘いと苦悩の種になりました。この試練は、神様がお決めになった時がくるまで終わらないはず。そして、その時はまだ参りません。」

深い闇が彼女を襲います。悪魔が「喜んで死ぬがいい。だが、主はお前の希望しているものを与えてはくれまい。それどころかもっと深い、虚無の闇を与えてくれるだろうよ。」と叫んでも、私はますます信仰のわざに励むのでした。

自分の召し出しに忠実であったテレーズは、この闘いと苦悩の苦味に満ちたパンを聖化してくださいよう、神様に願いました。

「神よ、あなたの子どもはあなたのお望みになる間は、いつまでも苦悩のパンを食べることを甘んじてお受けいたします。そしてあなたがお定めになった日が来るまでは、あわれな罪人たちが食事するこの苦味に満ちた食卓から立とうとはしません。おお、イエス様、人々によって汚された食卓が、あなたをお愛しする一つの魂によって清められますように。私はあなたの栄光に満ちた国に導き入れていただくまで、ただ一人でこの試練のパンを食べ続けましょう。ただ、私があなたに申し上げるたったひとつのお恵み、それは決してあなたに背かないことです。」

テレーズの病状は悪化し、やがて修室でしか仕事ができなくなりました。1897年6月、院長様は生涯の思い出を再び書き続けるように命じました。それが2冊目のノートになります。

テレーズは、わらの布団に乘せられて病室に移りました。最後の日々、苦痛と闘いながら一步步登ったこの階段ももう登れなくなりました。

ベッドの周りでは、3人の姉妹がテレーズの言葉を書き写します。

テレーズは死を恐れなかった、と想像する人もいるでしょう。「私が他の人々以上に守られているとどうして言えましょう。聖ペトロのように、私は主を決して見捨てません、と申しません。」

テレーズはますます衰弱し、ペンを使うことができなくなりました。しかし、院長様が命じた生涯の思い出のノートは、鉛筆で書き終えることができました。

そして、最後に、もう一度、修道院の回廊でテレーズは外の空気に触れ、姉テレーズはそこで写真を撮りました。

彼女はとても苦しみました。

「イエス様は苦しみのうちに十字架の上で亡くなりました。でもそれは、かつて見たことがない美しい愛の死でした。私は打ち砕かれて、神様の麦の粉とならなければなりません。主の無限の憐れみが必要とする私は、なんて幸せなのでしょう。」

8月半ば、テレーズはひどい渴きに陥りました。もう僅かの食べ物しか口にすることが出来ません。やがて、聖体拝領もできなくなりました。彼女は、ノートに最後の言葉を書きました。



「信頼と愛によって」

その年の夏、豊かな収穫から一粒の麦の穂がテレーズのもとにもたらされました。

「この麦の穂は、私の魂を表しています。神様は私を恵みで満たしてくれました。私自身と多くの人々のために。」

1897年9月30日、テレーズは24歳の生涯を閉じました。

臨終の苦しみの中でテレーズは言いました。

「おお、私は愛である神様にこの身を渡したことを後悔していません。」

以下は『小さき聖テレジア自叙伝』よりカルメル会訳

同じ修道院の姉妹が、列福調査の時にこう証言しています。

「私がどのような闇にいるかをお知りになったら！ 私は永遠の命を信じていません。この死すべき命の後には何も無いかのように思えます。私にとって全ては消え失せました。私に残されてているのは愛だけです」

彼女はもはや信じていないように見受けられますが、愛はあると感じています。これは矛盾ではありません。愛による恐ろしいほどの清めです。キリスト者の歩みの一部です。

他の聖人にも似た体験があります。彼ら彼女らは、感受性が強かったのでしょう。辛く気落ちした時には、心情を吐露しています。神は、その人独自に神秘的な仕方で聖人たちに「捨てられ:た」と感じる試練をおゆるしになります。これこそが十字架でキリストが経られた歩みで、パウロ他の聖人も経験しました。

パウロはテモテに「みな私を見捨てました」と述べた後すぐに

## II テモテ 4：17～18

「しかし、主はそばにいて、私を強めてくださいました。それは、私を通して福音があまねく宣べ伝えられ、すべての民族がそれを聞くようになるためです。そして、私は獅子の口から助け出されました。主は私を、あらゆる悪い行いから助け出し、天の御国へと救い入れてくださるでしょう。栄光が主に世々限りなくありますように、アーメン。」と書き送っています。

パウロに働く聖霊の力が、絶望に陥れるほどの誘惑を乗り越えさせてくださったのです。彼の人生の最後の15分が輝かしい明るい時であったのか、それとも闇だったのか？ 私たちには知る由もありませんが……。人間の歩みの神秘は、死の体験に向かって進みます。

それだからこそ、助けを求める人にどう関わるか見直す必要があります。重篤の方はなかなか心を打ち明けようとしません。本当に信頼している人にだけ打ち明けます。私たちの使命は、そういう信頼を呼び起こすことです。死を目前にして陥りがちな信仰や希望に反する誘惑に、共に立ち向かえるように支えるのです。

小さき花のテレジアは、生涯の終わりに語り尽くせない動揺と苦難に襲われていました。そのことを知った同僚の姉妹たちは驚きました。彼女が「臨終の人々のためにどれほど祈らなければならないでしょう。もし経験なさったら・・・」と漏らすのを聞きました。このように聖人たちの生涯は、私たちがキリストの苦しみやパウロの苦しみをより深く理解する助けになります。

**パウロはキリストの苦しみとどのように一致したのでしょうか？**

パウロは、苦しみの意味を救いの観点から学んだのでしょうか。私達も、深い信仰が苦難にあっても生きる恵みを与えてくれることを学びましょう。

## II テモテ 1・10～12

今や、私たちの救い主キリスト・イエスが現れたことで明らかにされたものです。キリストは死を無力にし、福音によって命と不死とを明らかに示してくださいました。この福音のために、私は宣教師、使徒、教師に任命されました。そのために、私はこのような苦しみを受けているのですが、それを恥じてはいません。私は自分が信じてきた方を知っており、私に委ねられたものを、その方がかの日まで守ることがおできになると確信しているからです。

苦しみの体験を通して教会的信仰のセンスが成長します。

## II テモテ 2：8～10

イエス・キリストを思い起こしなさい。私の福音によれば、この方は、ダビデの子孫で、死者の中から復活されました。この福音のために私は苦しみを受け、ついに犯罪人のように鎖につながれています。しかし、神の言葉はつながれていません。だから、私は、選ばれた人々のためにあらゆることを耐え忍んでいます。彼らもキリスト・イエスにある救いを永遠の栄光と共に得るためです。

## コロサイ 1：24～25

今私は、あなたがたのために喜んで苦しみを受けており、キリストの体である教会のために、キリストの苦難の欠けたところを、身をもって満たしています。私は、自分に与えられた神の計画に従って、教会に仕える者となりました。あなたがたに神の言葉を余すところなく伝えるためです。

## 私たち自身への問い

私たちの態度はどのようなものでしょうか？ 大変もろく、取るに足りない誘惑を感じやすく、困難な時を過ごしています。もろさの自覚は大切です。これがないと、口では綺麗な言葉を並べますが、困難に直面すると豹変します。これまでと全く違う言葉や態度に出てしまう危険があります。このために、パウロがたびたび勧めている警戒が必要です。

### I テサロニケ 5：3～8

人々が「平和だ。安全だ」と言っているときに、ちょうど妊婦に産みの苦しみが訪れるように、突如として滅びが襲って来るのです。決して逃れることはできません。しかし、兄弟たち、あなたがたは闇の中にいるのではありません。ですから、その日が盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。あなたがたは皆、光の子、昼の子だからです。私たちは、夜にも闇にも属していません。ですから、ほかの人々のように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んでいきましょう。眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔います。しかし、私たちは昼に属していますから、信仰と愛の胸当てを着け、救いの希望の兜をかぶり、身を慎んでいきましょう。

### エフェソ 6：11～13

悪魔の策略に対して立ち向かうことができるように、神の武具を身に着けなさい。私たちの戦いは、人間に対するものではなく、支配、権威、闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊に対するものだからです。それゆえ、悪しき日にあってよく抵抗し、すべてを成し遂げて、しっかりと立つことができるように、神の武具を取りなさい。

キリスト者として生きるということは、絶えず攻撃しに戻ってくる執拗な敵対者の前に身を置くことを意味しますから、少なからぬ試練です。日々のこと、毎日の単純なことを思うと大げさに聞こえるかもしれませんが、しかし、私たちの歴史や、他の国の歴史に起きた悲惨な試練を思い起こせば、人間の敵が確かに活動していることがわかります。敵は単純な仕方から隠れた方法、陰険なやり方に至るまであらゆる方法を駆使して、信仰や希望をそごうとしています。信仰の火花を消そうといつもたくらんでいます。試練は過ぎ去ったと思う時に、実は一番近くにいます。

キリストの苦しみ・パウロの苦しみを思うことで、私たちも困難の中にしっかりと立ち、勇気を持って闘える恵みを願うようになります。また、試練にある人を支えられる恵みを願いましょう。

### 振り返りの質問

Q. 人生を振り返って理不尽な扱いを受けたと感じたことがあるでしょうか？ イエスの受難、パウロの受難と重ねられる苦しい体験があるでしょうか？

Q. 「見捨てられた」という内的闇の体験があるでしょうか？ テレジアの靈的闇の体験から学べる  
ことがあるでしょうか？

Q. 敵対者（悪）はどのように自分を狙っていると感じているのでしょうか？

Q. 「私は自分が信じてきた方を知っており、私に委ねられたものを、その方がかの日まで守ることが  
おできになると確信している」というパウロの信仰に触れてどう感じますか？

## 9. 神はあわれみである

最後の黙想になりました。まとめとしてパウロのテーマ“**律法からの自由**”を取り上げましょう。  
「獄中書簡」に描かれている宇宙的展望です。靈操の結論として1つの言葉を選びました。パウロ  
にとっての受難が始まる最後の司牧的勧め「ミレトスでの説教」の結びです。使徒書によれば、公  
での生涯最後の言葉をパウロはミレトスで述べています。ですから、この説教はパウロがずっと考  
えてきたことを要約しています。パウロの最後の言葉を前に、彼がその時どんな心境で語ったのか、  
現代に生きる私たちが理解する恵みを願いましょう。

主よ、2000年前に説かれたこのみ言葉が、今も私たちの間で生きていて、力があることを感謝し  
ます。私たちは、み言葉を理解するには無能ですが、み言葉は私たちの弱さよりも力強く、もろさ  
を補う力を備えています。どうかみ言葉に心を開くことができますように。人生の途上で困難があ  
ってもみ言葉を信頼できますように。

イエスの母マリア、あなたはご自分に与えられたみ言葉がその通り実現するよう祈りながら、全  
てをみ言葉に委ねました。あなたが応えたように、私たちもみ言葉に自分を明け渡すことができま  
すように。私たちが現代の生活の中で、謙虚に奉仕できますように。アーメン

### 使徒書 20 : 32

そして今(カイ・タ・ヌン)、あなたがたを神とその恵みの言葉とに委ねます。この言葉は、あなた  
がたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に、恵みを受け継がせることができるので  
す。

説教を締めくくる荘厳な言葉です。これは典礼的な祈り・祝福の意味合いも含んでいます。ずっと心に留めていたことを強調するため、パウロは次の言葉も添えています。

### 使徒書 20：33～35

私は、他人の金銀や衣服を貪ったことはありません。ご存じのとおり、私はこの手で、私の必要のためにも、共にいた人々のためにも働いたのです。あなたがたもこのように労苦して弱い者を助けるように、また、主イエスご自身が『受けるよりは与えるほうが幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、私はいつも身をもって示してきました。」

このように、パウロの体験をまとめる結びの言葉は「受けるよりも与える方が幸いである」になります。彼の考えを端的に表現しています。

しかし、司牧生活を結論づける「正式な」結びの言葉は別になります。ミレトスの説教全体の中で、長老たちに話しています。パウロは今この人たちを後にして旅立たねばならず、教会の将来を気遣っています。長老たちも、今までパウロと共に生活してきたことをどうやって続けたらいいか？ パウロに問いかけています。ですから、この言葉は長老たちの質問に対するパウロの答えになります。共同体に向けられた遺言のような言葉ですし、黙想の締めくくりとして心に刻みましょう。イエスの遺言と関連づけて考えるのもいいでしょう。

ヨハネ福音書でイエスのみわざを要約するのは次の言葉です。

### ヨハネ 17：26

私は彼らに御名を知らせました。また、これからも知らせます。私を愛してくださったあなたの愛が彼らの内にあり、私も彼らの内にいるようになるためです。」

ルカ福音書での最後の言葉は警戒への勧めです。

### ルカ 21：36

しかし、あなたがたは、起ころうとしているこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈っていなさい。」

この警戒への招きは、ミレトスで説教にも含まれています。

マルコ福音書の最後の言葉も警戒への勧めです。「誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い」(14：38)でルカと似ています。

マタイ福音書の場合は慈善のわざについての審判です。福音史家は、それぞれ、イエスの公の説教を各福音書にとって特に意義ある言葉で結んでいます。使徒書もパウロの人柄と述べていたことを意味ある一句で結んでいます。私たちは、霊操の結びにこの言葉を取り上げ、決心を守り、黙想で知ることができた神の計画が実現する助けにしましょう。

## パウロの最後の言葉

### 「そして今」

ギリシア語では「カイ・タ・ヌン」とありますが、新約では珍しい表現です。「さて現在の状況に関して」という意味です。「私と離別しなければならず、将来は分からず、何が降りかかってくるか不安にさらされているあなた方の状況」という意味合いです。

これは、最初の迫害の時に、使徒たちがした祈りの荘厳な結びの言葉でもあります。

### 使徒書 4：24～29

これを聞いた人たちは心を一つにし、神に向かって声を上げて言った。「主よ、あなたは天と地と海と、そこにあるすべてのものを造られた方です。あなたの僕であり、私たちの父であるダビデの口を通し、あなたは聖霊によってこうお告げになりました。『なぜ、諸民族は騒ぎ立ち 諸国の民は空しいことを企てたのか。なぜ、地上の王たちは立ち上がり 君主たちは集まって 主とそのメシアに逆らったのか。』事実、この都でヘロデとポンティオ・ピラトは、諸民族やイスラエルの民と共に集まって、あなたが油を注がれた聖なる僕イエスに逆らい、御手と御心があらかじめそうなるようにと定めていたことを、すべて行ったのです。

主よ、そして今こそ（カイ・タ・ヌン） 彼らの脅しに目を留め、あなたの僕たちが、堂々と御言葉を語れるようにしてください。

パウロの場合も同じように、彼が示してきたすべてのこと、共同体での彼の務め、共同体との互いの愛情、将来予想される危険、・・・パウロが危惧していることなどが前提にあります。「そして今（カイ・タ・ヌン）」と結論するのです。

### 「あなた方を主にゆだねます」

この言葉は私たちに驚かせます。私たちなら「誠実でありなさい」「一致していなさい」「手紙をください」・・・などと諭されることを期待します。けれどもパウロは「彼らを主にゆだねます」と結びます。こうすることで、未来のことや試練があっても神のみ手にあることを強調します。神こそが、彼らを受け入れ、支えてくださるのです。

このような挨拶は、初代教会でよく用いられていました。第1回の宣教旅行の終わりの帰路、バルナバとパウロが信仰にとどまるように弟子たちを励ましています。

### 使徒書 14：23～26

また、弟子たちのために教会ごとに長老たちを任命し、断食して祈り、彼らとその信ずる主に委ねた。・・・そこからアンティオキアへ向かって船出した。そこは、二人が今成し遂げた働きをするようにと、神の恵みに委ねられて送り出された所である。



共同体のしきたりによれば、主にゆだね、恵みに委ねる言葉で話の終わりを結んでいました。祈りと断食をもって主に委ねるとするのは、典礼の荘厳な形です。私たちは、両手を広げ「さあ、あなた方を神の力にゆだねます」と言って、典礼の式を行う姿を想像できます。

「ゆだねる」という動詞には長い歴史があります。新約では「私は貴重な宝を持っているが、旅に出なければいけないので、信用できる人にゆだねる」という意味合いがあります。十字架のイエスの「父よ、私の霊をみ手にゆだねます」（ルカ 23：46）という言葉が神へのゆだねが頂点に達した状況です。このイエスの言葉は、主への信頼の極致です。イエスはご自身の命と死を神のみ手にゆだねます。神がそれを守り、彼に返してくださると信じて……。イエスは神の力の確かさに全てを賭けました。

イエスが口にされた詩篇「まことの神、主よ、み手に私の霊をゆだねます。私をあがなってください。」（詩篇 31：6）は、あらゆることを考慮した後、本当に頼れると悟り、神のみ手に自分を任せる人間の叫びです。

パウロは、親しい共同体のことを気遣いながらも、神こそが、みわざを推し進め、支え、照らし、導いてくださることを確信しています。この言葉は、司牧者としての愛と離脱の頂点を示しています。パウロは共同体を深く愛しています。海辺で船の傍の砂にひざまずいて祈り、泣きながらパウロの首にすがりついて接吻する人々の様子が、それをよく表しています。けれども、パウロは共同体が神に属すること、神は無限に力強い方であることを知っています。

### 「その恵みの言葉とに ゆだねます」

この表現はあまり使われないので説明が必要でしょう。

ルカ福音書は、イエスの最初の話でこの表現を使っています。ナザレの会堂で人々はイエスの話を聞き「みなイエスをほめ、その口から出る恵みの言葉に驚いていた」（ルカ 4：22）とあります。「恵みの言葉」は福音の類語で「神の創意」とか「救いの無償性の現れ」と似た意味です。価値のない罪びとの私をゆるす神の行為を表す際にも「無償」という言葉を使います。

マリアは天使から「ケカリトメネ＝恵まれた方」（ルカ 1：28）、つまり「とびきり恵まれた方」、「神の満ち満ちた無制限の恵みに浴した方」と挨拶されています。これは、新約の特徴とも言える用語です。新約で155回も登場するうち、パウロに約100回も見られます。パウロは「恵み」という言葉を、救い、信仰、福音、希望、霊、など人間への神の救いの計画について語る用語と一緒に用いています。反対の言葉は、律法、罪、自慢、肉などネガティブな言葉です。自己充足、おごりなどが、自分に閉じこもり「神の恵み」を締め出してしまいます。

パウロにとってキリスト者の使徒職は「あわれみに富む神の恵みを告げ知らせること」です。

## Ⅱコリ 6 : 1~2

私たちはまた、神と共に働く者として勧めます。神の恵みをいたずらに受けてはなりません。なぜなら、「私は恵みの時に、あなたに応え 救いの日に、あなたを助けた」と神は言っておられるからです。今こそ、恵みの時、今こそ、救いの日です。

この言葉は、福音宣教者の定義です。私たちの功德とかを超える神から与えられる無償の「恵み」です。神は私たちの心よりも偉大なのです。

コリントの第二の手紙には、このような恵みで養成される使徒の姿を描いています。

## Ⅱコリ 6 : 3~10

私たちは、この奉仕の務めについて、とやかく言われぬように、どんなことにも人につまづきを与えず、あらゆる場合に自分を神に仕える者として推薦しているのです。大いなる忍耐をもって、苦難、困窮、行き詰まりにあっても、鞭打ち、投獄、騒乱、労苦、不眠、空腹にあっても、純潔、知識、寛容、親切、聖霊、偽りのない愛によって、真理の言葉、神の力によってそうしています。また、左右の手に持った義の武器によって、栄誉を受けるときも、侮辱を受けるときも、不評を買うときも、好評を博するときにも、そうしているのです。私たちは人を欺いているようであり、真実であり、人に知られていないようであり、よく知られ、死にかけているようであり、こうして生きており、懲らしめを受けているようであり、殺されず、悲しんでいるようであり、常に喜び、貧しいようであり、多くの人を富ませ、何も持たないようであり、すべてのものを所有しています。

パウロは、辱め・恐れ・自分に閉じこもる生き方が、穏やかさ・喜び・堅固さ・他者を豊かにする生き方に変わることを示しています。これこそが生きぬかれた福音です。

先の引用に見られるように、自分の経験を吐露した後、パウロは「コリントの人たち、私たちはあなたがたに率直に語り、心を広く開きました。」(6:11)と述べているのは、意義深いことです。彼は、心のうちを全て出しました。

苦しい場面があっても神のイニシアティブが謙遜に生きるよう励ましました。パウロは、もうこれから共同体と共にいることはできず、話すこともできないでしょうが、神のみ言葉はいつも共にあり、み言葉の力が人間の弱さを償い、み言葉が共同体を刷新することを信じています。

使徒書でたびたびペルソナ化されたみ言葉が登場します。み言葉が行動し力を持っています。み言葉は、共同体の中で成長し、生き、働き、聖霊を通して教会にとどまります。

「この言葉はあなたがたを造りあげることができる」

ローマ 16 : 25~27



神は、私の福音すなわちイエス・キリストについての宣教によって、あなたがたを強めることができになります。この福音は、代々にわたって隠されていた秘義を啓示するものです。その秘義は、すべての異邦人を信仰による従順へと導くようにとの永遠の神の命令に従い、今や預言者たちの書物を通して明らかにされ、知らされています。この知恵ある唯一の神に、イエス・キリストを通して栄光が世々限りなくありますように、アーメン。

福音による神の力がはっきりと述べられている箇所です。ミレトスの共同体にパウロが与える最後の祝福とつながって読めます。

神の力への委託は、次第に「栄唱」になります。み言葉には、共同体を築き上げる力があります。共同体は、役割分担、秩序、カリスマの豊かさが互いを補い、組み合わせられる1つの体です。この体は、形成の途上にありますが、原動力はみ言葉です。

「聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができます」 神の言葉は、教会共同体の成長のために働き、まだ共同体に加わっていない人々を招きます。

## 結論

こうしてパウロは、使徒としての献身、徹底した離脱、忠実さを証しして私たちに別れを告げます。神こそが救ってくださるのです。ダマスコの途上で彼に現れたのイエスが、パウロの人生のすべてを負っています。パウロがまだ罪びとだった時、イエスが権能をもって彼に現れてくださって下さいました。このイエスからの救いは、共同体にとっても私たち個人にとっても同じです。共同体が形作られたのも、パウロが何かをしたからではありません。イエスが権能をもってご自身を現わされたからです。また、これからも一人一人に現われ下さいます。

それ以前に、モーセは山で次の言葉を聞きました。

## 出エジプト 33：19

主は言われた。「私は良いものすべてをあなたの前に通らせ、あなたの前で主の名によって宣言する。私は恵もうとする者を恵み、憐れもうとする者を憐れむ。」

解釈すると、神はあらゆるあわれみのもとであり、泉です。私たちの努力でも心がけでもありません。私たちがすべてを尽くしてもなお、秤は神のあわれみの方に傾きます。

神が私たちに救ってくださり、神が私たちに慈しんで下さいます。

パウロは、私たちに信仰を告白し、自分の体験をいくぶんか分かち合っして下さいましたから、今、少なくともいつとき、私たちに別れを告げることができるでしょう。

## 振り返りの質問

Q.パウロは投獄が待ち受ける別れ際に「あなた方(共同体)を主にゆだねます」と言っています。心配もある共同体を主に委ねるパウロをどう感じましたか？ 何を習ったらいいでしょうか？

Q. み言葉が私を造り上げている感覚、み言葉が人生を変えた体験があるでしょうか？

Q. 神のイニシアティブ・無償性という言葉がしっくりくるでしょうか？ 何かの体験がそう感じさるでしょうか？

Q. 黙想会は「神はあわれみである」でまとめています。私はいつ、どのように神様にあわれまれたと感じたのでしょうか？

Q. 今回の黙想会はパウロが亡くなる直前、ダマスコでの出来事に端を発するイエスとの出会いをどう回想するか、霊操に基づいて祈りました。自分は人生の終わりに、どう信仰生活を回想するでしょうか？ 今はどのような段階でしょうか？